

それでは、ここからは講師の皆様によりトーク「洪水から地域を守るために」、そして「安全・安心な地域づくりに向けて」を進めてまいります。講師の皆様、お名前をお呼びいたしますので、順にご登壇をお願いします。

まず、ホストをお務めいただきます長岡造形大学理事長・豊口協様です。よろしくお願いいたします。そして、ゲストスピーカーの長野県飯山市長・石田正人様、よろしくお願いいたします。同じく新潟県燕市長・小林清様、よろしくお願いいたします。そして、同じく新潟県見附市長・久住時男様、よろしくお願いいたします。皆様のプロフィールにつきましては、恐縮でございますが、お手元の資料を参考に、ご覧いただければと思っております。それでは、この後の進行は、豊口様にお任せいたします。よろしくお願いいたします。

(豊口)

最初に、先ほど上空から千曲川・信濃川を見ていただきました。なるほど、自分たちが生活している日本で一番大きな大河の生活圏というのは、大変なものだなとお考えになられたと思います。特に先ほども申し上げましたが、長野県内では狭窄部というところと、広がった扇状地になっている盆地の個所が繰り返し繰り返し、新潟県内では扇のように広がった平野の部分が、この地形をつくっているわけでありまして。

洪水になると、たくさんの水が流れてくるわけでありまして、狭窄部は盆地に溢れる水をうまく調整しながら地形をつくるわけでありまして、やがて扇状地ないしは氾濫地帯にやっけてまいりますと、洪水が大きく平野に広がっていくということで、今までの歴史は繰り返されてきました。

洪水による被害の映像が映されましたけれども、何度も何度も、この川はこういう被害を私たちに与えているわけです。それに対して私たち人間社会も、何とかしてこういった被害を食い止める方法はないだろうか、日夜努力をしております。

今日はお三方、市長に来ていただきました。それぞれの市長は今まで大変苦労して、治水といいますか、市民生活の安心といいますか、安全を守り続けてきた方たちばかりです。今日はその実際の体験を通してお話を伺って、この川が素晴らしい川であると同時に、おそろしい川であるかということと一緒に考えてまいりたいと思います。

最初に昭和57年、58年、今も映像に出てまいりましたが、千曲川の洪水がありました。水害が大きく広がりました。長野県では2年連続の大きな洪水、水害によって大変な被害が起きたわけでありまして。飯山の石田市長に今日は来ていただいておりますので、この辺のお話を少し伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

(石田)

ご紹介いただきました、長野県からまいりました飯山市長の石田でございます。今、先生からお話、そしてまた、事前に画像で昭和57年、58年の飯山の水害状況を皆さんから見ていただいたわけでございますが、昭和57年、58年の画面に表せなかった被害状況を少し私の方から説明させていただき、その後、水害を治した中で、今取り組みをしている状況に触れさせていただければと思うわけでございます。

昭和57年、私はちょうど農協の部長というので、それぞれ自主的に水害にかかわったわけでございます。

飯山を流れる千曲川、そして先ほど見附の市長さん、燕市の市長さんに会うと、長野県からの豪雨が仕掛けとなった水害ということも聞けるかなと思ったのですが、同じ水系だ

と、頑張ろうと、こんなことでご意見もいただいたわけでございます。

千曲川の流域面積は、長野県全体の約 53 パーセント。北アルプスから甲武信岳から、全て飯山へ流れて来るわけです。そういう状況下にあって狭窄部は本当に大変だと、確かに飯山市の歴史を見れば、治水ですべての歴史が話せるのではないかと思います。今でも風神祭の時期になると、水を治める神事が至る所で行われます、同時に、文化財として長く培われてきた神楽等も、水が出れば獅子を埋めることによって、治水という歴史も語られているわけでございます。

そういう中で昭和 57 年、支流・樽川の堤防が決壊し、先ほど紹介のような浸水被害のような形になりましたが、ただ一人も人的被害なかったということです。

当時、「有線放送」というものがありましたので、絶えず立ヶ花水位観測所で何メートルの時はうちの方はどのような状況だろうと、こういうことを市民は、そして地域の皆さんが身に染みて感じているわけでございます。

そういう中で樽川堤防が切れたということで、木島は大洪水になったわけでございます。一番そのような中でも、悲惨だったのは、当時、農業が中心でございますので、酪農家が非常に多かったわけでございますが、200 頭近い牛が水死しました。牛は「スタンション」という金具をはめられているのですけれども、それを切って出すことができなかった、それも切らずに自分が逃げたので精一杯ということで、20 頭くらいの牛が苦し紛れに暴れて小屋が動いたと、こんな悲惨な声もまだまだ語り継がれているわけでございます。

昭和 58 年は、同じような形で常盤地区の千曲川の本堤が切れたわけでございますが、浸水した水位は今までで最高の水位を示した、58 年度水害であったわけでございます。

木島地区の方は激甚災害を適用させていただきまして、国交省が早急に堤防の復旧に当たりました。そういうことで、しっかりと造っていただいて切れることはなかったのですが、今度はその反面、反対側の常盤の方がそっくり破堤してしまったということでございます。

私も現場に絶えず駆けつけていたわけでございますが、堤防を越水すると間もなく堤防が切れる、そのようすを実際に見ながら、本当に水の力はすごいものだのと、千曲川は私たちにすれば大事な農産物を育ててくれる神の川であり、いったん暴れると、本当に悪行の川だと申し上げながら、57 年、58 年の災害がまだまだ頭から抜けないし、今も台風が来ると、すぐ水害を思い出しているということでございます。

安全で安心できる市民生活が送られるように、治水をしっかりとやらなければということで国交省もいろいろな面でご尽力をいただいているわけでございますが、狭窄部については一日も早く掘削をしていただいて、流れをよくしてほしい。河床が埋まった時は、是非掘っていただいてということでございます。



(図 - 3 4)

国交省も真剣に対策を進めていただいていることで、昨年平成 18 年でも 58 年のあの水害の時に堤防が決壊することなく、多少水害の形はあったのですけれども、よかったなと

思います。

飯山市としても内水（川に排水できずはん濫した水）排除という、自分たちの地域で降った水がどうしても溜まってしまって、災害が発生することが多いわけでございます。これについては、国交省も昭和 57 年、58 年を踏まえ内水排除ポンプをしっかりと設置するように、一つ一つ事業を進めていただき、今は内水排除の形も整ったかと思っているわけでございます。

国交省にお願いしていることは千曲川の狭窄部と河床を含めた中で、障害に当たるものについては、できるだけ水の流れをよくしていかなければならないと思いますし、まだ飯山市では無堤地区もいっぱいあるわけです。先ほどもお話があったのですが、上流の飯山ばかり、長野県ばかり考えていけば、下流の新潟にまた迷惑がかかることもあるわけですが、皆さんと一緒に治水について取り組んでいければと思うわけです。

先ほども紹介がございましたが、飯山は、関川と信濃川の分水嶺のあたりですから、飯山にも何とか関沢トンネルをひっくるめて、飯山の関田山地に北陸新幹線のトンネルが開いたのですけれども、あれと同じように地下をくぐって日本海に洪水を流す方法はないかと市民から言われるわけですが、これは新潟に流すような工事というわけにはいきません。

市民は今までの住宅ではもうだめだと、とにかく水が入っても住める住宅ということで、ほとんどが 2 メートル近い高床にして家を造り替えたのです。その借金がしっかりと残って、57 年、58 年は、忘れることのできない水害だという状況であるわけですが、これからも国交省のそれぞれのご指導をいただきながら、県を含めながらしっかりと取り組んでいきたいと思っているわけでございます。

その中で、今私たちがこの人的被害を作らないで何とかできたということは、有線放送の大きな働きがあったからということを経験しながら、飯山市としては防災無線を引く中で、いくら電線が切れても、何があっても無線で届けるようなシステムで、まず人命にかかることのない災害を作り、そしてまた、地域の浸水もなくすことにこれからも取り組んでいければということですが、今までの経過については、国交省からいろいろな面に対応していただくことに絶えず市民も私、市長としても感謝しながら、さらに治水にしっかりと取り組んでいかなければ、市民の安心・安全の地域はできないと思って、57 年、58 年を経験しますが、よろしく申し上げます。

（豊 口）

ありがとうございました。先ほども空から見ていただきましたが、千曲川・信濃川としては、代表的な狭窄部なのです。川幅が狭い。これが洪水になりますと、狭いところに水が流れ込んでくるわけですが、それを掘削して少し流れを良くしようというお話や分水しようというお話を今いただきました。

ただ、掘削をして流れを良くすると下流の方で大変なことが起きる可能性もありますし、先ほどもお話がありましたように、これは国が全部管理している川ではない、長野県も管理している部分がありますし、新潟県が管理している部分もあるわけです。こういった特殊な管理状態の中で狭窄部の工事が進められる。その辺の調整といいますか、そういうことに関して何かご意見はございませんか。

(石 田)

今日、この場に国交省千曲川河川事務所の松原所長さんに一緒においでいただきながら、絶えずこの検討を続けておりますし、今年の 11 月には飯山市民に総参加いただく中で、千曲川サミットを開いていこうということで今計画を進めておりますが、今の狭窄部分はどうしても取り除かなければならない。多少障害になる構築物もあるわけですが、これはすぐ取り除くことは難しい面もありますけれども、できるだけ流れをよくするということが、治水に対しての最高の方策ではないかと思っ、これからも国交省、県とも話をしながら、しっかりと治水に努めていきたい。

治水、治水と言っていますけれども、千曲川が果たしてきた大きな役割というのは、ややもすると、災害が終わってしまうと忘れてしまう面もあります。この千曲川が果たしてきた、いわゆる新潟の頸城の米と同じように、おいしい米もうちの方も作らせていただく、そしてまた、沖積土によりゴボウだとかサトイモだとかいろいろなものを作らせていただいて、これも農業振興施策としては千曲川が大きな役立ちをしているということをお忘れることなく、これからも取り組んでいきたいと思っっています

けれども、水害になってくると、“コンチクショウ”と憎らしく、悪行の川にかわるのですが、これは国が、県が作り上げてきた一つの河川であります。そんなことでなくして治水を含めながら、先生がおっしゃるように、これからもそれぞれ協力していきたい。そして、私たちは新潟県とすぐつながっておりますので、県境から旧中里村（現十日町市）もまだ国交省の管轄内に入っていないということで、毎年会議を開きながら、できれば国交省の管理にしたいけれども、そうでない時はお互いに協力し合っということで話を進めさせているわけです。

(豊 口)

情報交流がスムーズにいったら、あまり問題がないかもしれません。それから、そういう治水の工事がスムーズに協力し合っければ問題がないわけです。とかくそういう情報交換といいますが、流れが滞ることがあるのです。そんなことで被害が大きくなることもあると思うのです。昭和 57 年、58 年の洪水の時に、下流に位置しております燕市ですが、小林市長、この時はどういう状況でしたでしょうか。

(小 林)

今、飯山市長さんからお話でしたが、皆さんもご存じのとおり大河津分水は、越後平野上流の分岐点ということで、洪水時のいざの時には下流の本流には、洪水を一切流さず、全て寺泊の海岸までの 10 キロメートルの分水路に放流していくという信濃川の治水の機能の核となっているところでございます。

日頃、非常に穏やかな川でございまして、素晴らしい河川景観と、周辺の環境が大変素晴らしい景観を提供しているところであります。これが上流に雨が降ってまいりますと、大変な状況になってくるということでございまして、地元に住んでおります私も、愛着のある、親しみのある地域でございまして、そんな中で、いかに大河津分水が役割をきちっと果たしてきているかということは、地域に住む方々は十分承知していらっしゃる方が多いわけでありまして。

ただ、昭和 57 年の台風 18 号は、前年の昭和 56 年に続き 2 年連続の既往最大級の増水

であったと言われていたところをごさいますて、9,300 立法メートル毎秒くらい流れたのではないだろうかと言われてます。この時、私もも何回かの水害を経験いたしておりますが、特に今お話のありました良寛で有名な「夕暮れの岡」、残念ながら当時は堤防が改修されておりませんで、「夕暮れの岡」と堤防がほぼ同じ高さでございました。まさにその時は堤防の上から手が洗えるという状況でございまして、私も経験いたしておりますが、初めて水防団に「土のう積み」の指令を出して、作業のお願いをしました。しばらくしてから、上流の減水という情報が次々に入ってまいりまして、土のう積み作業も途中で中断いたしました。大河津分水路の川幅は、分派点が約 730 メートルでございます。そして、河口では約 180 メートルのところではありますが、私も初めて大変な出水の災害の状況を目の当たりに見まして気持ちが悪くなって、みんなでじっと堤防の上から見ているのでありますが、両側がずっと盛り上がり、河川の中心部が低くなって、大変な泥水が流れてくるのです。(大洪水のピークでは兩岸の流れに比べて中心部流れが盛り上がります。また、大洪水が引くときは兩岸の流れに比べて中心部の流れが低くなります。)それをじっと見ておりますと気持ちが悪くなる、こんな災害は初めてだなど、口々に地域の方々も話しながら成り行きを見守ったということ、今でも克明に覚えております。

当時、私は町の職員でございまして、福祉の仕事を担当させていただいておりました。当然、川を挟んで対岸の左岸側の方にも集落、地域がございました。むろん中学校、保育園の子どもたちも、出水と同時に家へ帰さなければならなかったというところではありますが、残念ながら一気の出水で、子どもたちを帰すタイミングが取れなかったということでございます。

最初に通行止めになったのが、現在 JR の越後線「分水橋梁」、次に国道 403 号の「与板橋」、その後、国道 116 号の「大河津橋」、そして「夕暮れの岡」の下流にあります県道の「渡部橋」が通行止めになりました。渡部橋が通行止めになる際には、子どもたちが帰るまで最大限、待つてほしい、こんなことを県に強くお願いして、できるだけ早く保育園と小中学校の子どもたちを自宅に帰したいということで、県の方と直接交渉をしながらぎりぎりまで待つていただいて、何とか子どもたちを無事に自宅に帰し終わることができた。最後まで渡部橋だけが交通止めにならないで、県の方からも頑張っていたと。

一番最後(昭和 43 年)にできた渡部橋でございますが、我々も覚えておりますが、旧橋は渡るのに恐いくらいの木橋でございました。これを永久橋に切り替えていただいたことが、まさにこういう水害の避難時の大きな成果につながったと。

改めて昭和 57 年の水害、大河津分水が完成してから、初めて最大級の水害があったことを今でも克明に覚えているところでもあります。

(豊 口)

ありがとうございます。という大変な歴史がありますが、この水害の後、何か特に手当をしたようなことはありますか。

(小 林)

いろいろな会議で新潟市長さんと一緒にさせていただきます。旧分水町、小さな町の首長でございますけれども、常に歴代の新潟市長さんは分水の町長、新潟市民は分水町に足を向けて眠れないのだというお話を、挨拶代わりにいつもちょうだいしておりました。それはなぜかと言うと、大河津分水が県都新潟市を堂々と守り抜いてきている最大の施設だ

と、新潟市がこうやって頑張っていけるのも、大河津分水の施設のおかげですよということで、私も非常に感激をしながら、お礼を申し上げてきたのでございます。

そんな中から国の方としても、大河津分水の対応というものは、最大限のご努力をいただいてまいりました。この機会に改めて国交省の皆さん方に厚くお礼を申し上げたいと考えております。

昭和 57 年の水害では 9,300 立法メートル毎秒の水が流れました。当時の大河津分水路の流下能力は 8,100 立方メートル毎秒がギリギリで、後は水防活動等のための余裕高だというお話を聞いております。これを遥かに超えた 9,300 立方メートル毎秒でありますから、当時、築 60 年の経過をした中で、実は大変な被害が何箇所かで発生したと。これを契機に国としても、県都・新潟市を守る大河津分水の抜本的な大河津分水大改修をしなければならぬということで、おかげさまでいよいよ大きな事業がスタートできたと思っております。

特に新潟までの流れを調節します「洗堰」の下流の川底が異常に低下いたしまして、堰自体も築 60 年ということでございましたから、老朽化のために万が一倒壊となれば、下流の新潟市に莫大な被害が及ぶということから、国といたしましても、一気に大河津分水の大改修構想というものがスタートできたと私たちも評価をさせていただきながら、お礼を申し上げているところであります。

そんな関係から、これを機に平成 4 年に洗堰の全面改築に着手されました。そして、おかげさまで大変素晴らしい施設が平成 12 年に通水いたしまして、平成 14 年には、10 年にわたります洗堰の改築工事が竣工したところでございます。私が今更申し上げるまでもございませんが、これからの公共事業は、ただ施設だけを造り替えればいいというものではございません。周辺の環境に十分配慮した景観、デザイン、外壁に天然石材等を利用した他、石柱の下に魚道観察室も 4 か所設置していただいて、市民の皆さん、地域の皆さんからも施設を十分ご利用いただき、施設の効果を側面から見ていただこうと、ご配慮をいただいたところでございます。

そして、嘗々として 80 年、県都・新潟市まで守り抜いてくれました「旧洗堰」は、「新洗堰」の完成に合わせまして、その役目を終え、旧洗堰は平成 14 年に国の「登録有形文化財」に登録されています。大正時代の見事な土木技術の遺産が保存されることが決定されたときには地元として諸手を挙げて喜んだということも、この際、ご紹介を申し上げておきたいと思っております。

また、有形文化財の登録に合わせて旧低水路にせせらぎ水路や、体験水路等、多目的な機能を有した河川公園を整備していただきまして、素晴らしい河川空間として生まれ変わることができたと、非常に喜んでおります。

また、大河津出張所を移転改築されましたため、旧出張所を大河津の資料館ということで大々的にリニューアルいたしまして、大河津分水路の歴史と関係技術者、越後平野の発展の様子、あるいは大河津分水の働きなど、学校の子どもたちから大人まで十分学ぶことのできる素晴らしい施設としてオープンをさせていただきました。

この大工事を契機に洗堰の下流に架かります県道見附分水線の本川橋、これも非常に老朽化いたしていたところ、延長が 185 メートル、幅員が 14.5 メートル、アーチ型の朱色のローゼ橋、この辺にもあまり類のない素晴らしい長大橋も、県の方から特別のはからい

で治水施設の竣功にあわせて、架け替えていただきました。

これらの施設の竣功によりまして、新洗堰周辺は雄大な河川空間にマッチしたやすらぎの空間として、多くの方々から親しまれることはもちろんのこと、河川を総合的に学ぶ空間として大きく生まれ変わらせていただきました。本当に心から喜んでいるところであります。

そして寺泊海岸までの 10 キロ、この右岸堤防、あるいは左岸堤防等につきましても、当面、大規模改修に向けての準備がまだまだという状況でありますから、昭和 57 年台風 18 号の教訓を経て、年次計画で堤防のかさ上げ強化工事を進めていただき、地元としては非常に安心しており、改めて感謝いたしているところであります。

この台風 18 号、昭和 57 年の水害によりまして、一気に大河津分水の洗堰の改修、そしてまた、今着手していただいております可動堰の大規模改修が一気に進んできたことは、これだけ大河津分水は、新潟県にとっては欠くことのできない大変な位置づけの治水施設であるという認識をして、改めて感謝を申し上げる次第であります。

(豊 口)

どうもありがとうございました。この大河津分水の信濃川の治水に関する働きというのは、大変なものがあります。昭和 56 年、57 年、58 年もありましたが、そういう洪水の時にもこの分水がかなり大きな働きをいたしました。こういった洪水のあと更にこの分水が様々な形で補修され、機能も追加されたということで、信濃川にとっては非常に大きな鍵を握っている地域です。

まだご覧になっていない方は、是非行ってご覧いただきたいと思います。おそらくあれほど美しい景色は、ほかにはないだろうと思います。特に夕方、夕陽が沈んでいく時に、あの分水の土手に立って夕陽を見ていますと、広がった川面が黄金色に輝きます。本当に治水工事が人々に平和と安心を与えているのだなということをつくづく思い知らされる、素晴らしい場所です。

(豊 口)

今、この信濃川は平和な川になりつつありますが、昨年の平成 18 年の 7 月 19 日に長野県の方で大雨が降り、中流の地域で、大変な被害を生むのではないかと思われた時がありました。あの頃、市長の飯山市のあたりでは、いかがでしたか。

(石 田)

皆様、きつとご存じだと思いますけれども、長野県の千曲川源流の地域というのは、レタス栽培から始まって高原野菜の産地なのです。昔はそれなりに雨水をしっかりと土壌が吸い込む、山林が吸い込むということだったのですが、今は一挙に高原野菜地に変わってしまいました。すべて畑がビニール舗装(マルチング)されてしまったのです。ビニール舗装(マルチング)がされる、最近では、農道も水路もそっくりコンクリート舗装に変わるものですから、雨がしみ込まず一挙に水が流れ出てくるということですから、場合によりまして、それほど雨が降らなくても、一挙に川が氾らんする状況というのは、これからどんどん出てくるのではないかなと。

特に佐久、浅間高原、野辺山を含めた中では、皆さんも源流視察に行けば分かると思いますけれども、本当にビニールで農地が覆われているという現況であるということだけ、ちょっと皆さんにお話ししておかなければいけないかなと思っているわけでございます。

平成 18 年はそのようなことで、大洪水でありましたけれども、国交省からしっかりと堤防だけは造り上げてもらったという市民の安心感があるわけですが、まだ漏水があったというようなことで、今年、大きな工事を国交省からやっていただいて、これだけ補強してもらえれば大丈夫かなという安心を多少はしているわけでございます。

先ほどそれぞれの市長さんからお話がありました

が、昔から治水の工事というのは、川下からということが鉄則だと聞かされておりますが、新潟県の方は分水路がしっかり完備した中でよくなっていますけれども、長野県の私たちの飯山地区では、狭窄部にかかる部分については、取り除きできない。いろいろな事情もありますが、その次には上流から下流までともどもに協力していただいて、長野県も新潟のような安心できる体制をとともども、つくっていければと思っているわけでございます。

新潟の財政と長野県の財政の違いがありますので、無理を言えない点もあるわけですが、いずれにしましても、新潟へ、長野県全体の 53 パーセントの水が流れて行くということでございますが、遊水地等の洪水対策につきましても、堤防が補強されてくれば、それなりに遊水機能も果たしてくるかと思っているわけでございます。

そういう中では昨年平成 18 年、堤防が決壊しなかったということは、国交省が総力をあげて堤防の補強に当たっていただいたということ、それから先ほどちょっと申し上げたのですが、内水排除の関係については、国交省に非常によく対応していただいております。

新潟県中越地震の際に山古志でも使った排水ポンプを持ってきていただいたともお聞きしています。

小さい河川でも、内水（河川に排水できずはん濫した水）排除が行わなければならない場所もいくつかあるわけですが、家屋の浸水が始まった時は、国交省が新潟県上越市にある防災ステーションから出動して来てたということで、18 年度は浸水をだいぶ食い止めることができたという現状でございます。

先ほども言ったように、治水というものについてはしっかりと対処し、これもただ国がやってくれるからということではなくて、地元として、そしてまたできることについては、それだけの真剣な取り組みをしていかなければ、国が水を治めてくれるという考え方だけでは、治水はできません。

そういう中で私たちも立ヶ花水位観測所の状況を見ながら、避難勧告等には早急に打ち出していくべきということで体制も去年から一つの形にしてきておりますし、平成 18 年の時も早急に立ヶ花観測所から出されるデータを分析し、避難命令等をどんどん打ち出していったと、こんなことも市民を安心させる一つの施策に変わってきているということを申し上げておきたいと思っております。



(図 - 3 5)

(豊 口)

ありがとうございました。今日のテーマは水系一貫という一つの思想の上に構築されていますが、こういう状況で飯山市の石田市長がこういう政策をお執りになりました。その影響が大河津分水、燕市の方にもあったのではないかと思うのですが、その時はいかがでしたでしょうか。

(小 林)

今、縷々申し上げましたが、平成 17 年に、初めて防災ヘリで甲武信岳の上流まで空からずっと視察させていただきました。上空から千曲川・信濃川の状態が手に取るように分かりました。長野県における千曲川の高水敷の広さ、非常に大変だなと思いながら下ってまいりました。今、石田市長さんからお話のありました、最大の狭窄部、これだけ川幅が広いところが上流にあり、その下流には、ものすごく狭いところがありますから、日頃から治水対策に頭が痛い方がいっぱいいらっしゃるのではないだろうかと考えておりました。

また反面、これを改修して、この水が一気に信濃川に流れ込んだ時に、我々のところはいったいどうなるのだろうか、これを考えてみますとぞっとしまして、何としても大河津分水の大改修をきちっとした俎上に上げていただいて、進めさせていただくべきだろうと、こんなことを考えながら視察しました。

(豊 口)

ありがとうございました。いろいろな水害、洪水の年代がだんだん近づいてまいりましたが、一番私たちが記憶に新しい、大きな水害をもたらしましたのが、つい 3 年前です。平成 16 年に 7.13 水害というのが起こりました。たまたま私は燕市役所で会議をやっておりまして、4 時頃会議が終わったので、挨拶をしたら、高速道路が止まっていますよという話になりました。どうして止まったのと聞きましたら、大雨で高速が止まっています。そんな高速は聞いたことはないと言って出てきたら、高速道路は全部自衛隊が使っておりまして、緊急のために一般の車は入れない。急遽国道 8 号に何とかたどり着いて三条の方を見ましたら、もう車の屋根まで水がきていた。身動きならない状態になったことを思い出しました。

こういう水害を通して、今いろいろな集中豪雨が頻繁に起きてきている状態になっていますけれども、見附市の久住市長、いかがでございますか、この辺のことについて少しお話をいただきたいと思います。

(久 住)

刈谷田川は信濃川の下流域にある支流ということで、刈谷田川は信濃川に合流するところというのは、今の大河津分水の下流になりますから、新潟市に流れるところに直接水が合流していくという、下流に影響がある川です。

平成 16 年 7 月 13 日は、どんな雨が降ったのかというと、日雨量 421 ミリという、ことで先ほど説明がございましたけれども、ある人たちは 400 年に一度の雨だという、形だったのです。

実は刈谷田川というのは、刈谷田川ダムがありまして 100 分の 1、すなわち日本で一番整備された川だったのです。その川も想定以上のものがあり得るのだという、その中でこういう災害が起きたということでもあります。

いずれにしても、一つの川、今日のテーマは「水系一貫」ですが、当時だと栃尾市の刈谷田川、その上に守門岳、そして信濃川に流れる。すなわち、上流と下流が連携しなければ、根本的な一つの川の災害についても予測、または想定、対応ができないというのが、災害の対応の中で一番感じたところでもあります。

写真にある小学校は避難所だったのです。1 階は浸水し、2 階に朝まで子どもたちが待っていてくれたのです。

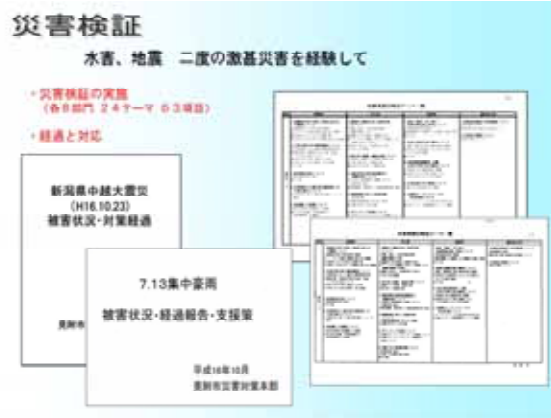
私ども避難勧告が早かったという点も、避難所までの時間を想定した。だから、956 名が 1 日で消防、警察、それから自衛隊も含めて助けることができた人の数でありました。幸い亡くなる人がおりませんけれども、そういう中での対応だったということでもあります。これは今思い出すと、当然のことだと思います。

ただ、集中豪雨という何百年に 1 回の雨というのは、やっぱり想定以上です。そして、それは繰り返して来る。7.13 と言いますが、それは繰り返して来る。7.13 が最終的に終わったのは 8 月に入ってからです。その間に 12 回の避難勧告を出しました。7 回の避難勧告を解除した。こういう中で二度とこういう体験をしたくない、そのためにはどういうものが不備で、これから構築してよくしたいのか。特に水害というのは、「防災」と

というのはなかなか難しいのがあるかもしれませんが、「減災」という言葉がございます。減災というものを私どもいろいろ知恵を出していくというのが、現実に行えることだろうと、そのためにどんな情報が必要か、その情報をどう判断するか、その判断したものをどう市民に伝えるか、伝わった市民からどういう形で避難してもらえるか。私ども見附市はこの年、平成 16 年 7.13 水害から 100 日後に「新潟県中越地震」の被害を受けましたけれ



(図 - 36)

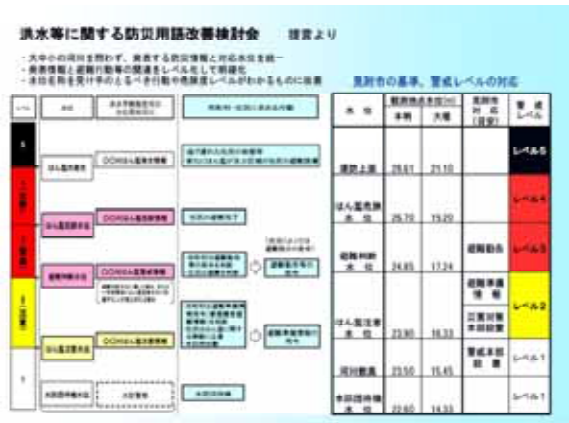


(図 - 37)

ども、水害と地震とちょっと違うのは、災害が起きるまでにある程度の時間が予測できるということです。この時に何をなしたか、それによって災害の量と質が違って来る、これが水害の私どもができてきたことなのです。地震というのは、早くても 10 秒前にしかある面では見えないということになりますから、そこから先のことは同じように地震も水害も一緒ですけれども、水害の場合は雨が降り出した、降る予定だ、台風が来る、そう思ってから何をその時間になし得るかというのが大きい違いではないかと、それを私ども二度とあんな体験の中でやりたくないということで多少整理したものがございますので、私どもの見附市で今取りかかったところのポイントだけ、整理してお話しさせていただければと思います。

これは水害と地震ですけれども、この地震の時に市民、職員を含めて何が良かったか、何が悪かったか、ああすれば良かったというのを 8 部門 24 点 63 項目で一度整理した、多分これからやるのは、これが規範にあったので多少整理ができたのだと思います。これが今から見れば、大事なことだったと思っています。

そして、私も委員でしたが、国土交通省が「洪水等に関する防災用語検討会」をやりました。そして、今、河川の水位が一本化しました。それまでは、洪水に関する言い方も用語もものすごく専門的で、私は分からなかった。1 年かけて私も参加したのですが、最終提言をまとめ、今こういう五つの水位のレベルになりました。水防団待機水位というのが初めです。この水位は、これから県や国からアドバイスをもらって、



(図 - 38)

そろそろ水防団が待機すべき水位というのがレベル 1。二つ目、例えば刈谷田川氾らん注意情報と出るのは、市町村の皆さん、そろそろ避難準備情報の発令を考えていい水位ですよ。次のレベルは刈谷田川氾らん警戒情報、これは避難勧告、お年寄りお一人で逃げられない人たちには、そろそろ逃げてもらっていいよという水位ですよ。その次が、刈谷田川氾らん危険水位、危険というのは、もうこの段階から市民の皆さんすべて避難し終わっていなければいけない水位ですよ。そして次の段階は、もう災害が発生している。避難所にどれだけ行くかという水位に統一できて、今これから整備が始まってくるということになりました。これは多分これから全国にこの整備をしていくと非常に分かりやすい、こういう範囲に変わったことをご案内しました。

これに基づいて私どもの上流の水位とか、そういうものがどの段階でどうなったら、どういう対応をするかという体制が一歩進んだところであります。

これも同じです。

そして、今のものを整備するために、まず何が災害の情報として必要だったのか、何が足りなかったのかというのを整理したのです。そして、私どもはまずダムの情報、今雨が降った、この時に1秒間に何トン入って、何トン排出する、すなわち今の刈谷田川上流の守門岳の雨であれば、このダムはもう耐えきれないというところまでどのくらい、緊急放流までは何時間もつのかという情報が、当時はなかなか入らなかった。今は幸い国や県も協力して、24時間入るようになりました。

二つ目、河川水位の情報。さっき言ったところです。私どもの刈谷田川であれば、上流に自動水位計というのを6か所つけていただいて、10分ごとに入る。

三つ目、これは民間気象情報とありますが、これは気象庁も同じです。ピンポイントの気象情報が入る。だから、集中豪雨というのは1点ですから、今テレビですと、例えば中越地区にどれだけ雨が降りますと言っても、なかなか刈谷田川に関係する雨は分からない。しかし、技術的には1キロ四方の気象予測ができる。だから、専門の予報士から、見附市の刈谷田川に影響するところでは雨がどのくらい今後降るのか、今がピークだという連絡が入るようになる。

最後に、携帯電話とかいろいろと発達しますから、それで川の色だとか流れというのは、市民の人から情報が入る。こういう情報の整理をしました。

そして、その情報が気象の情報、水位の情報、それからその他の情報が関連した時に、初めてこれによって判断をする。避難準備情報をすべき、避難勧告をすべき、避難指示をすべきかというのを一つの表に出しました。当時、市長がいないと発令できないというのがありますけれども、市長だっていつも見附にいるわけがない。だから、私以外の人たちも客観的に7人が集まって、これだったら避難準備情報を出しましょう、勧告を出しましょうという、情報の関連性を一つの表にしたということになります。

そして、避難準備情報の決断をした。それを市民の皆さんにどうお伝えするかという方策です。一つだけで完成することはないのです。サイレンというのを私どもは使っていま

水害時の配備体制、避難情報発令基準の整備

●次のいずれかの基準に達したときに配備

警戒準備体制

初期警戒員	次期警戒員	河川治水科が揃ったとき
大雨警報発令時 (水防隊の出陣一斉時)	大雨警報発令後水防隊が集まったとき	警戒からの連絡 10分以内の降雨量が10mm以上の場合

第1次配備【警戒体制】 警戒レベル1

配備要員	監視所長	監視所主任	水防(監視所主任)	河川治水科員
1. 大雨警報発令後水防隊及びその他の関係以上職員が揃ったとき	1時間雨量: 20mm以上 又は 3時間雨量: 40mm以上	大雨: 18.0mm 又は 本雨量: 23.5mm	大雨: 18.0mm 又は 本雨量: 23.5mm	警戒からの連絡、河川治水科員が揃った時

●次のいずれかの基準に達することが想定されるとき、河川情報等の分析も付いた配備を継続する

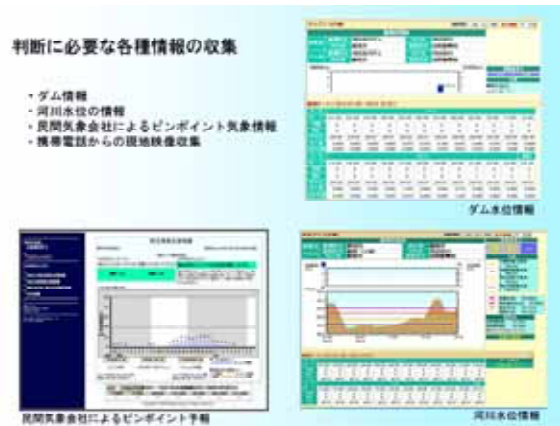
第2次配備【警戒体制設置】 警戒レベル2

配備要員	監視所長	監視所主任	水防(監視所主任)	河川治水科員
1. 大雨警報発令後水防隊及びその他の関係以上職員が揃ったとき	1時間雨量: 20mm以上 又は 3時間雨量: 40mm以上	大雨: 18.0mm 又は 本雨量: 23.5mm	大雨: 18.0mm 又は 本雨量: 23.5mm	警戒からの連絡、河川治水科員が揃った時

第3次配備【災害対策本部設置】 警戒レベル3

配備要員	監視所長	監視所主任	水防(監視所主任)	河川治水科員
1. 大雨警報発令後水防隊及びその他の関係以上職員が揃ったとき	1時間雨量: 20mm以上 又は 3時間雨量: 40mm以上	大雨: 18.0mm 又は 本雨量: 23.5mm	大雨: 18.0mm 又は 本雨量: 23.5mm	警戒からの連絡、河川治水科員が揃った時

(図 - 39)



(図 - 40)

情報の発信

- サイレンによる避難情報の伝達 (17ヵ所増設し34ヵ所)
- 福祉員宅、福祉施設、学校、企業などに防災FAXを設置
- MCA無線を避難所、広報車に配備
- 携帯電話による情報の配信
- 見附市ホームページ、携帯電話向けサイトに情報掲載
- エフエムラジオ新潟と災害時緊急情報放送に関する協定を締結
- 地域イントラネットによる防災状況確認システムの構築

緊急メール

MCA無線、携帯電話からの映像の様子

MCA無線発信実験 (サイレンスピーカー)

(図 - 41)

す。7月に東京の方で、「人は逃げないもの」というシンポジウムをしました。人は逃げないというのが心理学の情報だと、自分だけは危機は迫らないという。だから、956名は逃げてくださいと言っても、逃げなかったのです。ということから、私どもはサイレンを17か所、今は34か所にしました。昔でいけば戦争の時の空襲警報ではありませんけれども、危険がこの市内のどこかで生じているという、これは心理作戦ですけれども、こういうものから含めてファックス、水害の時はファックスがよかったです。企業には避難の情報がいっていなかったということがありまして、今、区長さんとか企業にはだいたい防災ファックスが入る。それから無線のこと、携帯メール、地震の時もそうですが、メールはかなり使えた。だから、私どもは今4,000名、市内の約1割以上の人に、危険情報というファックスの内容が携帯メールですぐに入ることになります。こういうものを今しております。それから、ホームページとかFMラジオ、イントラネット、いろいろ輻輳したもので市民の皆さんに早急にお伝えするという形にしています。だから、新潟に働いている人も携帯メールで、見附の実家が今危ないというのが入る仕組みにしたということでもあります。

そして、伝わった市民の人が、どのような形で逃げるのか、その仕組みであります。これについては防災ファミリーサポートということで、2,618名が見附市では自分の力だけでは逃げられないという登録をされた方です。その人たちは、例えば救急車だって限界がある、そして福祉の車だとか、今はいろいろ協力ももらって地域の防災ファミリーサポート、あの家庭のお二人は、近くの私どもの家で面倒をみるよというネットワークであります。そういう形で第1



(図 - 42)

次避難所を設定して、そこまではファミリーサポートの人がお連れして、自分の家を守る前に、まずその人たちをお連れする。第1次避難所に集まった支援の人は近くの料理屋のバス、介護用のバスを総動員して、もっと安全なところに行くというようなことであります。ハザードマップというのは、まさに、いざという時に、「自分の家は、最悪は3メートルくらい浸水するよ」という意識を持っているという大きな役割を持っています。こういうものを含めて自主防災組織も、ファミリーサポートのベースになります。35だったのが、今は90か所に増えました。そういう形で、地域のことは地域で守ろうと、そして地域の避難できないお年寄りには地域で助けよう、こういうネットワークを作ったところでもあります。

そして、これは刈谷田川も信濃川の支流ですから、上流から下流という全体の中で物事を考えなければいけない。1秒間に1,550立方メートルというのが、刈谷田川を一番整備した状況なのです。ただし、7.13水害の時に1秒間に1,750立方メートルの水が流れた。この差、毎秒200立方メートルはどんなに整備をしても溢れてしまう。今回、私どもは見附市で刈谷田川を何とかしないと、信濃川の皆さんに迷惑がかかる。あの時に刈谷田川が切れなくて、五十嵐川が切れなかったら、先ほど2兆円と言いましたが、新潟市の4万世帯がだいたい被害を受けていた。中之口川は堤防からギリギリまで来たわけです。



(図 - 43)

それを含めて整備はするけれども、それ以上、信濃川に緊急に流さないようにということで、見附市の上流で今100町歩300人の農家の皆さんを説得して、田んぼをいざという時に使って、その毎秒200立方メートルを一旦、受けてくれる遊水地というものを造っております。

300人のうちの数人の方は、「なぜ下流のために自分の田んぼを犠牲にしなければいけないのか」と言う、その人たちを今一生懸命説得しています。

それは、新潟の人やこの人たちに、下流の整備がしっかりしないと、上流も犠牲にならなくてはならない、こういう厳しいものもあるわけで、そういうことをやっているのを是非、ご理解いただければありがたいと思います。

今100町歩の遊水地をいざという時にそこで受けて、12時間は何とか耐えるという整備をしているところです。これは国の協力を得て、日本で初めてのケースを思い切ってやってみようとしているところであります。

そして、これは防災訓練です。私ども何と言っても1年にいっぺん、こういう災害を忘れないような形で続けていこうと思っています。そのために、見附市は43,000人の人口なのですが、3年間で1万人以上が参加してくれています。総人口の25パーセント、そしてこれを繰り返していこう、そして、自分たちの町を、自分たちの地域



(図 - 44)

を守っていこうと、災害を受けたからこそ、そういうものを自分たちでやって、それを災害者責任としてそう感じていない皆さんにもお伝えしていこう、こんなふうになっているところでもあります。以上です。

(豊口)

ありがとうございました。3市長にいろいろとお話を伺いました。上流でやらなければいけないこと、中流でやるべきこと、そして下流の人たちが上流、中流の方たち

のお仕事に対して対応できるような政策を展開するかというふうな、水系一貫のそれぞれの責任の姿が見えてきたような気がいたします。

ここでちょっとお時間をいただいて、本日は、立体交流シンポジウムを開いておりまして、長野の方からもたくさんの方が聞いてくださっています。そこの方にも参加していただきたいと思ひまして、千曲塾の塾長の市川さん、聞こえますか。

(市川)

聞こえます。

(豊口)

どうもご苦労様です。今までの3市長のお話を通して、何かご質問がありましたら、お伺いしたいと思います。

(市川)

それでは、会場の皆さんの中で、ただ今の新潟県と飯山市の市長さんからいろいろ報告がございましたが、それについてご意見なり、疑問の点などがありましたら、あげていただきたいと思ひます。お願いします。

(長野会場)

千曲市に住んでいますが、更埴市から上田へかけて、おそらく日本で一番雨が少ないのではないと思うのですが、佐久の方から落としてくれて千曲川は濁るけれども、ほとんど圧倒的に雨は佐久で降ってくれる。

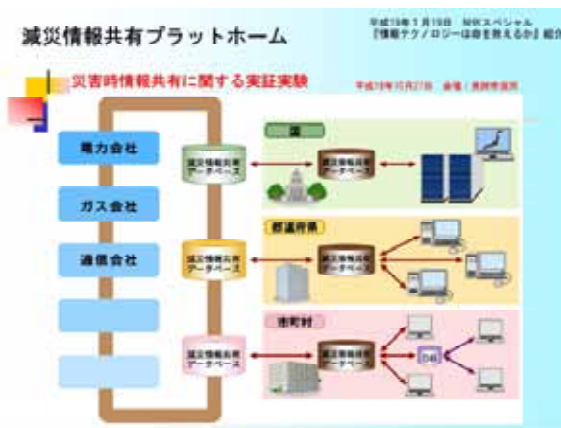
それにもかかわらず上山田、戸倉のところにある白鳥園のところまで直角まではいかないけれども、土手に向かって相当流れていったのです。

それで、万葉橋を直した時に土が溜まって、その下がぐっと流されて、魚のつけ場があったのだけれども、その土がみんな持って行かれて、今、相当大仕掛けで工事をしています。その下の八幡の平和橋の右岸も細々と流れているのだけれども、水が土手にぶつかっています。

それで、稲荷山の粟佐橋の上の緑のドームのある養護学校に水がすごい勢いでぶつかって、飯山や新潟県の方たちほどではないけれども、斜めに水が当たっているので、これを読んだら、無堤防のところや低い堤防がたくさんあると。ちょうど今から102年前、大正6年に内務省堤防というのを造ったと。

それで、飯山市と新潟市の一部の市長さんたちが一生懸命で、上の方はのほほんとして。

この間の台風も台湾や朝鮮や中国の方へみんないって日本にはあまり来なかったけれど



(図 - 45)

も、いろいろと話を聞いていると、最近でもあったと。

それで、今から 102 年前にできた堤防が、今堤防じゃないところがいっぱいあるということは、国民全体がたるんでいると思う。市と市の結びつきがない、県というのは何のためにあるのだというような感じを受けるのだけれども、県だって本流から外れたところは県の管轄地になっているという話だけれども、昔の内務省がやった 102 年前の世界にもう一度かえって、上流とか下流とかに関係なく全部のそこに住んでいる市民、市長さん、市町村長が集まって国に任せればいいのだと、国は県に任せればいい、県は市へ任せればいい、みんな逃げ道を作っているのです。

千曲市もそうですけれども、これだけ異常気象が世界で起きていて、各地で氾らんが起きて、堤防に穴が開いていくと思う。そうすると、飯山や新潟みたいになると思うのだけれども、もっと真剣に住民が考えなければ、よくよく人ごとだと思っている。災害が起きてから、慌てて考えると思う。忘れた頃にやってくる。以上で終わります。

(豊 口)

ご意見として拝聴しておきたいと思います。ありがとうございました。この会場でどなたか、ご質問はございませんか。

(新潟会場)

私は長岡市と言いましても(与板は) 燕市と隣り合わせなのです。それで、大河津分水の話が市長さんから随分出ていますけれども、下流の話については大分詳しくいらっしゃいますけれども、分水というのは上流もよく見てもらいたいのです。あれほど素晴らしい風光明媚なところ、分水というのは川の中に白鳥が悠々と泳いでみたり、今でしたら、ススキの穂が本当に見事なものです。ススキの原野はおそらく何日も見られないけれども、花見などというものではないです。こういうものも燕だけではなくて、長岡だってやっぱり信濃川なのです。

それと、与板というところは川幅が一番広くて、信濃川の中に島があって耕作をしているのは、ここしかないのです。おそらく川の中に島と名が付いているのは、私も調べていないから分かりませんが、島自体が長さで 4 キロ、幅が 500 メートルくらい、かなりでかいものです。

さっき飯山市長さんが言われた「狭いから」と、うちは広くて困るのです。広いということは、久住さんが言われた遊水池と同じ役割をしているのではないかと。それと、水が出てきた時には、水の心配はよくしています。たまたまここで与板地区改修工事というのが出てきまして、やっぱり危ないのだと、こういうところに安心できるような川にしてほしいと。ただ、風光明媚なことは天下一品ですから、小林さんもよく上流も眺めてください。以上です。

(豊 口)

ありがとうございました。私も同感でして、あの辺の流域は例えようがないくらい、四季を通じて美しいところだと思っています。ここに治水の成果が表れて、安心・安全な地域だということ、そのキーワードを抱きながら、信濃川が平和のまちづくりに貢献してくれることを期待しているわけです。しかもそういう成果がだんだん実ってきているのだなという気がいたします。